

【研究論文】

ヘルスプロモーションを目指した介護予防における 作業療法士の間接的支援の支援構造

—住民運営通いの場への参加促進要因についての作業科学の視点からの一考察—

田島 明子¹⁾, 近藤 克則^{2), 3)}, 慶徳 民夫⁴⁾, 幸 信歩⁵⁾

- 1) 湘南医療大学 保健医療学部
- 2) 千葉大学 予防医学センター 社会予防医学研究部門
- 3) 国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 老年学評価研究部
- 4) 医療創生大学 健康医療科学部
- 5) 福井医療大学 保健医療学部

E-mail: akiko.tajima@sums.ac.jp

Structure of indirect support that can be given by occupational therapists in preventive care aiming at health promotion

- A consideration from the viewpoint of Occupational Science on factors promoting participation in a community-based social program -

Tajima Akiko¹⁾, Kondo Katsunori^{2), 3)}, Keitoku Tamio⁴⁾, Yuki Shihou⁵⁾

- 1) Shonan University of Medical Science, Faculty of Health Sciences
- 2) Center for Preventive Medical Sciences, Chiba University
- 3) Department of Gerontological Evaluation, Center for Gerontology and Social Science, National Center for Geriatrics and Gerontology
- 4) Iryo Sosei University, Faculty of Health Sciences
- 5) Fukui Health Science University, Faculty of Health Science

要旨

目的：本研究では、住民運営通いの場への参加促進要因を質的、帰納的分析により抽出し、その結果から、間接的支援のための支援構造を考察することを目的とした。対象と方法：個別インタビューはサロンの立ち上げに関与した A 氏に行い、フォーカス・グループ・インタビューは、サロン研究やそれに類似する高齢者介護研究を実施してきた研究者 4 名に行い、結果を、帰納的に分析し、カテゴリ化を行い、カテゴリを説明する概念を付した。また先行研究を参考にし、さらに作業科学の知見を基にテーマを設定した。結果：people に関わる要因と place に関わる要因に分類された。People に関わる要因は、作業的存在としての belonging と doing に分けられた。考察：人を作業的存在として捉えたとき、サロンは、健康志向性を持った、高齢者の誰をも受け入れる belonging を用意し、ソーシャルキャピタルを育成する doing を提供している place であると整理できた。

キーワード：住民運営通いの場、間接的支援、作業療法士、ヘルスプロモーション、ソーシャルキャピタル、作業科学

Key words : Local Senior Salon, Indirect Support, Occupational Therapist, Health Promotion, Social Capital, Occupational Science

1. はじめに

WHOは、1986年にオタワ憲章を発表し、ヘルスプロモーションを、人々が自らの健康をコントロールし、改善していけるプロセスと規定している¹⁾。つまり、住民や当事者の主体性を重視していること、各個人がよりよい健康のための行動をとることができるような政策等も含めた環境を整えることに重点が置かれている。健康日本21では、人的資源だけではなく健康づくりを支える社会・労働環境の整備、自然環境の保全や生活環境の整備を社会全体で推進することが重要とされている²⁾。健康日本21(第2次)では、「健康格差」が取り上げられ、「あらゆる世代の健やかな暮らしを支える良好な社会環境を構築することにより、健康格差(地域や社会経済状況の違いによる集団間の健康状態の差をいう)」の縮小の実現がさらに掲げられた³⁾。その1つの処方箋として着目される概念として「ソーシャルキャピタル」があげられる。ソーシャルキャピタルは、「参加」「互酬」「信頼」で説明される社会の財産と言えるが、1990年代後半より、ソーシャルキャピタルと所得格差、死亡率との関係を探求した研究が顕れ、その関係を明らかにする論文が多数報告されている⁴⁾。

作業療法の基礎科学と位置づけられる作業科学分野においてもPopulation Healthへの関心の高まりがあり、2014年には、その特集が組まれている。作業療法は人を作業的存在ととらえ、well-beingを目指しているが、個人への介入よりも、より大きな介入や分析単位が必要であり、今後さらに学際的な研究が必要であるとしている⁵⁾。

2015年度より厚生労働省は、介護予防の取り組みを見直し、一次予防事業と二次予防事業

を区別しない住民運営の通いの場を増やし、地域リハビリテーション活動支援事業として、住民運営の通いの場へのリハビリテーション専門職の関与を促進するとした⁶⁾。また日本リハビリテーション病院・施設協会他においても今後、地域リハビリテーション活動に資するリハ専門職育成を推進していくとしている⁷⁾。この介護予防政策の見直しの根拠の一つとなったのが、愛知県武豊町での武豊町憩いのサロン(以下、サロンとする)の取り組みの一連の評価研究である⁶⁾。

サロンの根幹となる特徴として次の3点があげられる。①武豊町、武豊町社会福祉協議会、日本福祉大学が三つ巴となっている、②ポピュレーションアプローチ(高リスクを抱えていない集団に働きかけ、集団全体がリスクを軽減したり病気を予防したりできるようにすること)によりソーシャルキャピタルを豊かにし、身体、心理的活動を行うことが健康に繋がるという考えを形にした介入プログラム理論を基に運営が行われている⁸⁾⁻¹³⁾、③高齢者はボランティア参加ができ、ボランティアはサロンの運営を主体的に担い、参加者のサロンへの積極的な参加を促し、交流を促進する役割を担っている¹⁴⁾、である。それらを実現するために、作業療法士が関与してきたことも特筆できる。作業療法士がサロン開所前の住民説明会やボランティア育成研修やサロン後のボランティアミーティングにおいて、サロンにおける介護予防の意義、ボランティア活動が介護予防や認知症予防につながる利点の説明、またボランティア活動についての肯定的評価や助言、サロン内容の改善への助言について間接的支援をしてきた¹⁵⁾。

サロン会場であるが、2007年度の開始当初より増加を続けており、2020年には14か所での実施が見込まれている¹⁶⁾。1回あたりの平

均参加者は約 60 名となっており、武豊町の 65 歳以上の高齢者の 11.3% が参加し¹⁷⁾、うつや認知症の改善傾向¹⁷⁾、参加者同士の健康情報の授受にも効果を示している¹⁸⁾。

そこで作業療法・作業科学分野への貢献として、またリハビリテーション専門職として、ヘルスプロモーションの促進のためにソーシャルキャピタルを活用した介護予防の取り組みにおける間接的支援のための支援構造を明らかにすることが必要である。本研究では、サロン立ち上げにボランティアとして関与した A 氏への個別インタビュー調査とサロン研究やそれに類似する高齢者介護研究を実施してきた研究者 4 名へのフォーカス・グループ・インタビューの調査結果について、質的、帰納的分析から、サロン参加促進要因を抽出し、作業的観点や作業的存在として捉えた際のサロンの持つ意味から作業療法における間接的支援のための支援構造を考察することを目的とした。

2. 研究方法

インタビュー調査対象者：個別インタビュー対象者は、愛知県武豊町に在住し、公務員として勤務し、定年後、サロンの立ち上げにボランティアとして関与した A 氏、60 代半ば、男性であった。フォーカス・グループ・インタビュー対象者は、サロン研究やそれに類似する高齢者介護研究を実施してきた研究者 4 名であった。

インタビュー日時・場所：個別インタビューは 2016 年 8 月 22 日 10 時～12 時まで、A 氏の住居から近隣にある施設の会議室にて、インタビュー実施者とインタビュー対象者の 2 名のみの静かな環境で行った。フォーカス・グループ・インタビューは 2017 年 3 月 31 日、2017 年 4 月 21 日の 2 回、10 時～12 時まで、大学の会

議室にて実施した。

インタビュー方法：個別インタビューでは、研究目的を事前に説明したのみで、インタビューガイドは特に用意せず、自由面接法にて実施した。フォーカス・グループ・インタビューは複数の人間からなるグループダイナミクスを応用した質的な情報把握の方法¹⁹⁾であるが、フォーカス・グループ・インタビューでは、研究目的を事前に説明するとともに、活発に意見を出し合うための素材として A 氏への個別インタビュー内容よりサロン参加促進要因を帰納的に分析した結果を提示し、それを基にフォーカス・グループ・インタビューを行った。

分析方法：データは次の手順で、帰納的に分析を行った。まず、個別インタビュー、フォーカス・グループ・インタビュー内容を IC レコーダーにて録音したものを逐語録化し、基礎データとした。続いて、基礎データをコード化し、その内容の類似性と差異性から比較検討し、類似性に基づいて整理・分類しカテゴリ化を行い、カテゴリを説明する概念を付した。

さらに、Wilcock ら²⁰⁾、Capon²¹⁾ をカテゴリ化したデータのテーマ化に際して参考にした。Wilcock ら²⁰⁾ は、人を作業的存在として捉え、作業的存在としての成り立ちは、doing (すること)、being (あること)、belonging (所属すること)、becoming (なること) の 4 要素から説明できるとしている。人は、作業を行う (doing) ことで、所属を得る (belonging) などして、あるいは doing そのものから、存在 (being) を規定し、それが時間軸を辿ると becoming になる、というものである。Capon²¹⁾ は、住民の作業的観点からの健康決定因子の視点として、People (人々)、Place (場)、Planet (地球環境) を掲げている。つまり、Wilcock ら²⁰⁾、Capon²¹⁾ をテーマ化の参考に

した理由として、抽出されたサロン参加促進要因を、健康に関わる作業的観点や人を作業的存在として捉えた際の成り立ちから分節化し、作業療法士の間接的支援の支援構造を浮き彫る意図があった。また分析結果は、インタビュー対象者の内容チェック、サロンの立ち上げの運営支援に関わる4人の研究者によるグループメンバーからのスーパーバイズを受け妥当性を確保した。

倫理的配慮：研究者は研究実施に際し、研究目的と方法を含む研究計画と倫理的配慮について対象者に説明し、研究協力の同意を得た後に実施した。なお本研究における倫理的配慮については新田塚医療福祉センター倫理審査会審査で承認を得ている（新倫 30-27 号）。

3. 結果

「people に関わる要因」「place に関わる要因」に分類された。まず「people に関わる要因」の確認をする。カテゴリは **【】** で、サブカテゴリを **〈〉** で示した。またカテゴリを生成した逐語録を合せて表 1 に提示した。

Wilcock ら²⁰⁾を参考にし、作業的存在としての belonging と doing の 2 点のテーマ設定を行った。大カテゴリは **【】**、中カテゴリは「」、小カテゴリは **〈〉** で示した。またカテゴリを生成した逐語録を合せて表 1 に提示した。

まず belonging として、**【行政の施策との連動】** **【行政や研究者、作業療法士のボランティアへのバックアップ】** が含まれた。**【行政の施策との連動】** については、「place に関わる要因」にも含まれたが、サロン参加者のヘルスプロモーションへの集団志向性を高める大きな要因になっていると捉え、people のなかの belonging にも含めた。**【行政や研究者、作業**

療法士のボランティアへのバックアップ】は、サロン運営の要であるボランティアのバックアップは重要課題だが、行政が財政的なバックアップをし、研究者がサロンの効果を参加者に提示しているため、ボランティアの意欲が高まり参加を得られているとの内容であった。

doing に関してみると、**【参加・継続】**として、「呼び込む」「つなぐ」「受け継ぐ」「男性参加者への配慮」が分類された。さらに「呼び込む」には〈ボランティアの日頃の人脈がボランティア参加に与える影響〉、〈役員などの権威の力がボランティア参加に与える影響〉、「つなぐ」には〈グループ化と排他性〉、「受け継ぐ」には〈代替わり・新陳代謝をする〉が含まれた。

〈ボランティアの日頃の人脈がボランティア参加に与える影響〉は、ボランティアの日頃の人脈がボランティア参加に影響するとの内容であり、〈役員などの権威の力がボランティア参加に与える影響〉は、各地区の役員の人脈によってボランティア参加を募ったりするため、サロンによっては男性ボランティアが多いといった状況が生じるとの内容であった。〈グループ化と排他性〉は、参加者の仲良しグループ化がかえって参加しづらい人を生じさせることもあるとの内容であり、〈代替わり・新陳代謝をする〉は、若い年代にボランティア役割を担ってもらうことが課題であり今後は運営方法に工夫を要するとの内容であった。

「男性参加者への配慮」には、〈男性参加者（団塊世代）の増加〉、〈性別による行動の違い〉が含まれた。〈男性参加者（団塊世代）の増加〉は、団塊世代が定年退職をし、地域活動への参加者が増加しているとの内容であり、〈性別による行動の違い〉は、女性はグループ化しやすく、男性は一人で行動することを厭わない様子が観察されやすいとの内容であった。

表1 「peopleに関わる要因」についてのカテゴリ、サブカテゴリ、逐語録内容

テーマ	大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	逐語録内容	
people	belonging	行政の施策との連動		<ul style="list-style-type: none"> ・第5次武豊町総合計画自体の計画期間が平成20年から32年なんで、20年ってことは、2008年ですよ。だから、憩いのサロンのスタートが2007年5月ですよ。だから、ある地区をつくるより後だったかもしれせんけど。いずれにしても3カ所つくって、その総合計画の中に位置づけして、福祉でまちづくりっていうんですか、そういう位置づけをしたことが、1つの大きな方向性にあった 	
			行政や研究者、作業療法士のボランティアへのバックアップ		<ul style="list-style-type: none"> ・計画的にやってるサロンで、そういう効果という面の測定ができて、それを結果として還元できる。で、ボランティアも、そういう効果があるっていう役割っていいのかね。ボランティアさんの意義っていうのは、やっぱりそういう効果が見えること。自分たちの活動っていうのが、役に立ってるってこと、見えることが大事 ・ボランティアさんが一番ですよ。私は、もうやっぱりボランティアさんだと。ただ、ボランティアさんを支えるのは、研究者がきちっと結果を出してる。それから、行政も予算を削ってない。 ・サロンの介護予防効果や認知症予防効果、そうなるためのプログラム内容について作業療法士がしっかり説明していたことが地域住民やボランティアのモチベーションになっている
	doing	参加・継続	呼び込む	ボランティアの日頃の人脈がボランティア参加に与える影響	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの組織化っていうのは大きな要素にはなと思うんです。どういう人たちがボランティアをつくるかによって参加者も変わってくるし、できるだけ、ボランティアさんが知ってる人だけじゃなくて、誰でも参加できるような広がった関係っていうのをつくりたい
				役員などの権威の力がボランティア参加に与える影響	<ul style="list-style-type: none"> ・Aサロンは男性が多いんですよ、ボランティアさんのうちの、男性の方が多くて。地区の役員さんが、どんどん、どんどん引きずり込みながら。役員さん、男の人が主流じゃないですか、絶対男の人とは限らないですけど、で、その人たちがどんどん、どんどん引きついで新しく入ってくるから、そこで、男の方が増える ・区長は1交代代にしてあって。あれはいい面もあるんで、独裁で地域を抑えられちゃうんで大変で。だけど、継続的に仕事を進めて、やっぱり1年だと難しい部分があるんですけど、いい面も、悪い面もあるんですけど。そういう地域の活動に参加してみると、地域の状況が分かってきて、サロンっていうのもいいのかなっていうことで参加してみようっていうのは、1つの結論
			つなぐ	グループ化と排他性	<ul style="list-style-type: none"> ・参加しても、参加者のグループ化っていう問題は当然よくある。やっぱり来て、つながる状況がうまくいかなかったりすると参加しなくなることもあるのかなと思う
			受け継ぐ	代替わり・新陳代謝をする	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者も、新しい年代層をいかに取り込んでいくのか、ボランティアさんの代替わりをしていくのか、というようなことも当然課題として理解をされて。だから、ボランティアさんの運営の仕方も変えてみたり、いろんな形で努力をされてるんですね、ボランティアさんの役割をどう考えていくのかとかね。 ・当然9年もやったら、それはそういう組織としての新陳代謝とか問題はあと思うんですね。だから、ボランティアさんの新陳代謝と同時に、それにつられて参加者も当然範囲が限定されたものから広がっていきなさいいけない
		男性参加者への配慮	男性参加者(団塊世代)の増加	<ul style="list-style-type: none"> ・最近、全体、まず、参加者見てみると、男性が増えるんで ・退職しても、会社の人と付き合いある時期ってあるじゃないですか。でも、そのうちに離れていっちゃう。そうなったときに、やっぱりそういう地域活動をして、サロンに参加するっていうこともあるのかな。だから、やっぱり60まで、65まで、会社の組織の中で働いてきたという習慣っていうのか、そういうものから少しずつ解放されたときに地域に参加するっていうことが出てくる。だから、これから増えていくのではないかなとは思ってます。増えてかないと、孤立しちゃうですよ 	
			性別による行動の違い	<ul style="list-style-type: none"> ・辞めるときに、女性は徒党を組んで辞めちゃうとかね。男の人はね、あんまり辞めないとか、そういう特徴もね。 ・女性陣っていうのは固まるし、男性陣っていうのはそれぞれ自由度高 	

表1 「peopleに関わる要因」についてのカテゴリ、サブカテゴリ、逐語録内容(つづき)

テーマ	大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	逐語録内容
people	doing	独自性と魅力 あるサロン運営	各地区での運営の独自性	・この間、Bサロン見てたら、お茶なんかは自分たちで出して運ぶっていうふうにしてある。参加者の年代層が若いこともあると思うんですけど、やり方はいろいろあるんだろうと。だから、それぞれのサロンの参加者層によって、完全にお世話をする対象じゃなくて、一緒にやるっていうことができる年代層のサロンと、はっきり高齢化して、お茶とか、そういうものはボランティアさんがお世話しなきゃいけないサロンと、すごく参加年代層によっても運営の仕方違う。その辺は、13カ所それぞれ独自性を持って運営されてる
			自由度のあるメニュー作成	・Cサロンなんか、もういっぱいメニューを入れちゃいましてね。もう参加者が振り回されているぐらい。この間、8月にやったときは、子どもばやしで。子どもばやしですから時間かかんないんですけど、子どもばやしに子どもが15人ぐらい来て、はやしをやって。そのあと、婦人会の人が来て盆踊りやって、で、健康体操やって、それから、回想法とビンゴゲームを兼ね合わせたやり方なんですけどそういうゲームをやって、お茶会もやる ・Eサロンだけは、脳トレとか、体操とかはあるんだけど、催し物が入ってないんで少し違いがあるんです
			参加者それぞれの参加目的	・表だってどうのこうのってことないけど、やっぱり参加することによって楽しみを持っていたり、それから、それが健康になり、そういう習慣として、社会参加をするっていう機会になってるっていう
			楽しい雰囲気づくり	・楽しいですよ、パーって見ていただくと分かんと思います。あれを19日間やってたら、元気でみんな回ってたら健康ですよ、第一笑えるし、しゃべれるしね
		既存のコミュニティグループとの 関わり	出前ボランティア	・武豊町、出前ボラって言ってるんですけど。催し物をする人、おはやしだったりね。催し物やってる団体の活性化なりなるようにね、要するに、催し物する場所の提供をしています。催し物をするによって、違うサークルの支援もしてる。結果的に、出演場所をつくることによって支援をしてるという、そういうこともある
			芸能祭	・芸能祭ってというのは、まさに地域で、趣味の会やってる人たちの発表場所。サロン以外の、そういう趣味のやってる人たちが集まった発表会。武豊町の中でそういう趣味の会をつくってる人たちの、年1回の発表場所ですよ。だから、そういう意味で、文化的なつながりっていうのはある、っていうか上手につくってるんでしょ。ああいうメンバーの人たちが、サロンに行ってもやるっていう。サロンぐらいただたら、どんな人がいても、間違っても、別にどうってことないし。受ける側も、そんなことを期待してるわけじゃなくて、一緒に楽しむっていうことを期待してるんで
			老人クラブ	・Cサロンの地区は、老人クラブの加入率が高いんですよ、実際の参加はしないんだけどみたく。老人クラブで活動するのは実質的には会員数多いんだけど、特定の人以外は…。老人クラブも基本的に組織は広いんだけど、活動してる人が一部だとするならば、サロンは、参加する人は自主的に活動してるよりもっと広い人たちを対象に。老人クラブのメニューでは、歩け歩けで、歩けないけど、でも、サロンに来て体操することができる。だから、自主的に範囲が広いし、今まで老人クラブに参加できなかった人も参加できるんじゃないか。そういう意味で基本的に活動範囲が違うんで、必ずしも老人クラブに入っていないとって、サロンは参加できる
			厄年の会	・42歳になったときに厄落としをするというので、みんなが地域に寄付をするとか、学校に寄付するとか、神社に寄付するとか、そういうことをするために。まあ、寄付しなきゃ、お金がいるんで、みんなで、その年代の人を、よそから入ってきた人も、地区にいる人も一緒にしてグループにして、積み立てをして、同じ年代の年である、それぞれのえとの同じ年の人で寄付をしていくと。で、そういうつながりができるんで、それ以降、その同じ年代の人同士、よそから来た人も、地元の人と一緒に飲んで飲み会を継続していくと。そうすると、もうほんとに地域につながっていく

表2 「placeに関わる要因」についてのカテゴリ、サブカテゴリ、逐語録内容

テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ	逐語録内容
place	行政の施策との連動		・第5次武豊町総合計画自体の計画期間が20年から32年なんで、20年ってことは、2008年ですよ。だから、憩いのサロンのスタートが2007年5月ですよ。だから、ある地区をつくるより後だったかもしれませんが、いずれにしても3カ所つくて、その総合計画の中に位置づけして、福祉でまちづくりっていうんですか、そういう位置づけをしてたことが、1つの大きな方向性にあった
			・新興住宅地がわりかしそういう組織ができるっていうのは、やっぱりつながってないんで、つながっていかなくやとか、そういう意識があると思う
	地域特性への配慮		・参加するのに駐車場がないもんですから、Cサロンは、だから、地域の人しか来れない。会場もそんな広くないんでいいんですけど。そういうことで、地域の参加者の割合が高いのは駐車場のないことが大きいですね
			・まず、駐車場があるっていうこと、車運転できなくなってしまうば別ですけど。広く、わりかし広範囲から人が集まるんで、駐車場があると
通いやすさ	駐車場の有無の影響		・まず、駐車場があるっていうこと、車運転できなくなってしまうば別ですけど。広く、わりかし広範囲から人が集まるんで、駐車場があると
	会場の利便性の影響		・駅から歩いて3分かかんないですから、会場がね。ですから、2分で行っちゃいかもしれないけど、ほんとにすぐそばなので、だから、回れる。中に、D地区ってところはとてよ辺鄙なところで、そこは、会場は施設を借りているですよ、特養のとこ。特養の施設を借りて、その一部をサロン会場に使わせて頂いて、そこは、ちょっと足がないと

【独自性と魅力あるサロン運営】には、〈各地区の運営の独自性〉、〈自由度のあるメニュー作成〉、〈参加者それぞれの参加目的〉、〈楽しい雰囲気づくり〉、「既存のコミュニティーグループとの関係」が含まれた。〈各地区の運営の独自性〉は、ボランティアと参加者の関係はサロンによって様々であり、参加者の年齢層によっては参加者がボランティア役割を担うサロンもあるなど、各サロンの運営には独自性があるとの内容であり、〈自由度のあるメニュー作成〉は、各サロンのボランティアがメニューを作成しているため、個性的なメニュー内容になっているとの内容であった。〈参加者それぞれの参加目的〉は、参加者はそれぞれ楽しみや健康づくりなどの参加目的を持ち、主体的に参加をしているとの内容であり、また〈楽しいサロンの雰囲気〉

は、各サロンとも楽しく、笑いがあり、おしゃべりのできる雰囲気であるとの内容であった。「既存のコミュニティーグループとの関係」には、〈出前ボランティア〉、〈芸能祭〉、〈老人クラブ〉、〈厄年の会〉が含まれた。〈出前ボランティア〉は、サロンにてフラダンスなどを出前で行う地域サークルであるが、サロンが出演場所を支援しているとの内容であった。〈芸能祭〉は、武豊町に年に一度ある趣味活動の発表場所である。芸能祭への参加者がサロンにて趣味活動の発表を行うこともあり、気軽に楽しめる場になっているとの内容であった。〈老人クラブ〉は、各地区にあるが、活動内容が重複すると競合するため、そうならないよう活動内容を工夫し、参加者にとっては選択機会となるような配慮が重要であるとの内容であった。〈厄年の会〉

は、武豊町に住む男性が厄年である42歳になると作るグループであり、その後も集まりが継続していく。地域のつながりを作る重要な機会となっているとの内容であった。

次に「placeに関わる要因」には、Capon²¹⁾を参考にし、【行政の施策との連動】【地域特性への配慮】【通いやすさ】が含まれた(表2)。

【行政の施策との連動】は、サロンが第5次武豊町総合計画・後期戦略プランのなかの福祉のまちづくりの事業に位置づいていたため、それが推進力となったとの内容であった。【地域特性への配慮】は、新興住宅地に居住する人は他地区に以前から居住する人と比較し、人とつながろうとする意識が強いとの内容であった。【通いやすさ】は、〈駐車場の有無の影響〉、〈会場の利便性の影響〉が含まれた。〈駐車場の有無の影響〉は、駐車場の有無は外出先の制限につながったり、遠くのサロンへの参加が可能になったりもするとの内容であった。〈会場の利便性の影響〉は、サロン会場には利便性の良い場、悪い場とあり、利便性により参加が制限されるとの内容であった。

4. 考察

本研究結果から、作業的存在や作業的観点として捉えた際のサロンの持つ意味から、作業療法における間接的支援のための支援構造を検討したい。まず明らかになったこととして、サロンにおいて作業的存在を支える際の規定性の前提としてbelongingが存在しているという点がある。またbelongingには、peopleについては集団志向性が深く関係していること、placeについては地域特性に配慮をする必要があることが示唆された。

集団志向性とは、地球規模での健康問題に作

業的視点で取り組む際に、自然災害時などの生活困難が生じた際に、それでもWell-beingなoccupational spaceを創造するために必要な視点の1つとして提示されている²²⁾。サロンへの参加促進要因の重要な要素として、施策との連動や、行政、研究者、作業療法士のボランティアへのバックアップがあがっていたが、それらはまさに、ヘルスプロモーションに住民の意識が向かい、サロンという場が住民の健康志向意識の高まりに支えられたヘルスプロモーションの場として機能し、維持していくうえで重要な要素ではないかと考えた。

サロンにおいて作業的存在としてのpeopleを支えるdoingに必要なものは、ソーシャルキャピタルの1つの要素である「参加」を支えるものでもある。ソーシャルキャピタル研究において、その類型がほぼ整いつつある²³⁾。川島²³⁾には、ソーシャルキャピタルの類型として、橋渡し型(異質な人の結びつき、外部志向的)・結合型(同質な人の結びつき、内部志向的)、垂直型(垂直的な上下関係のある関係)・水平型(上下関係や主従関係のない関係)、構造的(役割、ネットワーク、規範など構造を示し得るもの)・認知的(個人の心理面に影響を与えるもの)、とあるが²³⁾、本研究結果をみると、結合型を基本的に目指しており、他のボランティアグループとの共存関係も考慮していることから水平型を意識し、また、ボランティアが主体的に取り組みを行うことから、構造的ソーシャルキャピタルを効果的に活用し認知的ソーシャルキャピタルを高めようとする戦略が備わっていると言える。本研究結果より、参加・継続を支える重要な要素として、独自性と魅力あるサロン運営が挙げられている。作業療法士は、同じ作業活動であっても、そこに、会話や別の意味を賦与する機会を補い、毎回のサロンプログラム

のマンネリ化を防ぎ、楽しいものにする工夫や、既存のコミュニティーグループとの共存的補完的関係のための集団活動の取り組み方法を心得ている。したがってサロン運営による介護予防活動は作業療法士独自の視点が活かされる取り組みであるとする²⁴⁾。

また、地域在住高齢男性の活動特徴やサロン参加要因については斎藤ら²⁵⁾や田島²⁶⁾があるが、高齢男性は外出・趣味活動をしている人が比較的多く、サロン参加については既にある人間関係を介して役割意識を持ち参加している事例が多いことが明らかになっている。高齢男性が参加しやすいサロン内容やサロン参加経路を用意できることが高齢男性の参加を促進する方法となると考える。

作業的存在を支えるサロンのPlaceについてみると、まず、サロンが武豊町の施策に連動していたことは場づくりに大きなインセンティブを与えたと言える。そうした後ろ盾があれば、取り組みの発展可能性が期待できると言えるだろう。もう1つ重要な点として、地域特性への配慮があった。これについては、JAGES(Japan Gerontological Evaluation Study 日本老年学的評価研究)プロジェクトが開発したJAGES HEART (Health Equity Assessment and Response Tool 健康の公平性評価・対応ツール)が恰好の取り組みだろう。JAGES HEARTは、全国25保険者31市町村のデータをもとに、22のコア指標と18の推奨指標からなる介護予防の見える化システムであり、保険者職員が地域診断を行い課題に取り組む過程を、評価まで含めて総合的に支援することが可能となる。2011年に行われた保険者共同研究会では、本システムが現状の見える化、課題の発見、改善の手がかり取得に役立ったという声が多かった²⁷⁾。長崎県松浦市では、介護予防事業報告など

の情報を基に地域住民の健康・生活課題の「見える化」を行い、住民、関係者、市町村保健師と情報共有をしながらサロン展開を行ってきた。それにより、三者の協働が強化され、サロン参加者数増加やサロン満足度が向上したとの結果が得られている²⁸⁾。今後このような地域診断支援ツールの開発、普及、使用の検討と推進が各地域で行われることにより、各地域の課題を発見し、多くの地域在住高齢者にとって意味や価値の感じられるサロン運営を行えることの一助になると考える。また、通いやすさ、についても、サロンの有効活用のために移動負担の軽減を図ることが重要であるとの認識から地理情報システムに基づいた最適配置の検討がなされている^{27, 29)}。今後、サロンのplaceを考える際には、開発されている様々なツールを活用しながら、ソーシャルキャピタルの特性にも配慮しつつ、place作りを行っていくことが望ましいと考える。

人を作業的存在として捉えたとき、サロンは、健康志向性を持った、高齢者の誰をも受け入れるbelongingを用意し、ソーシャルキャピタルを育成するdoingを提供しているplaceであるとまとめることができよう。

今後は、介護予防を目的とした住民運営の通いの場で支援を行う作業療法士の役割についての研究結果²⁴⁾を併せつつ、ヘルスプロモーションを促進する介護予防における地域作業療法実践の評価法開発を目指したい。

謝辞:本研究は平成28年度科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究「介護予防を目的とした住民運営通いの場での地域作業療法学実践モデル構築と評価法開発」(JP16K12964)を受けて行われた。

文献

- 1) World Health Organization:Ottawa Charter for Health Promotion. <http://www.who.int/hpr/NPH/docs/ottawa_charter_hp.pdf> (2018年4月15日アクセス)
- 2) 健康日本21 ホームページ. <<http://www.kenkounippon21.gr.jp/>> (2018年4月15日アクセス)
- 3) 厚生労働省. 健康日本21(第2次) ホームページ. <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryoku/kenkou/kenkounippon21.html> (2018年4月15日アクセス)
- 4) 木村美也子. (2008). ソーシャル・キャピタルー公衆衛生分野への導入と欧米における議論よりー. *Public Health*57(3):252-265.
- 5) Frank,G. (2014). Occupation for Population Health:An Appreciation.*Jornal of Occupational Science*21(1)77-80.
- 6) 厚生労働省. これからの介護予防. http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/yobou/ (2018年4月15日アクセス)
- 7) 一般社団法人日本リハビリテーション病院・施設協会他. 地域リハ活動に資するリハ専門職育成のための道標ーリハ専門職が地域でいきいきと活躍するためのテキストー. <http://www.rehakyoh.jp/images/pdf/rp_ikusei2015.pdf> (2018年4月15日アクセス)
- 8) 平井寛. (2009). 介護予防におけるポピュレーションアプローチの試みー武豊町における地域サロン事業の計画と実施(第1回武豊町プロジェクトの概要). *地域リハビリテーション* 4(1):84-87.
- 9) 平井寛. (2009). 介護予防におけるポピュレーションアプローチの試みー武豊町における地域サロン事業の計画と実施(第2回計画書と事業計画・準備組織ができるまで). *地域リハビリテーション* 4(2):172-176.
- 10) 平井寛. (2009). 介護予防におけるポピュレーションアプローチの試みー武豊町における地域サロン事業の計画と実施(第3回住民との協働の始まり). *地域リハビリテーション* 4(3):264-268.
- 11) 平井寛. (2009). 介護予防におけるポピュレーションアプローチの試みー武豊町における地域サロン事業の計画と実施(第4回事業の具体化に向けた住民ボランティアによる協議). *地域リハビリテーション* 4(4):348-352.
- 12) 平井寛. (2009). 介護予防におけるポピュレーションアプローチの試みー武豊町における地域サロン事業の計画と実施(第5回武豊町サロン事業の効果評価と最近の事業の動向). *地域リハビリテーション* 4(5):428-431.
- 13) 平井寛. (2009). 介護予防におけるポピュレーションアプローチの試みー武豊町における地域サロン事業の計画と実施(第6回武豊町プロジェクトのこれまでを振り返って). *地域リハビリテーション* 4(6):514-517.
- 14) 小林美紀. (2011). 楽しく・無理なく・介護予防ー地域と協働で進める「憩いのサロン」. *保健師ジャーナル* 69(5):386-392.
- 15) 竹田徳則. (2014). 地域介入による介護予防効果検証ー武豊プロジェクト. *総合リハビリテーション* 42(7):623-629.
- 16) 日本老年学評価研究ホームページ. 武豊プロジェクト. <<https://www.jages.net/>>

- project/kainyu/taketoyo/> (2018年4月15日アクセス)
- 17) 竹田徳則. (2008). 認知症. OTジャーナル 42(7):665-669.
- 18) 大浦智子・竹田徳則・近藤克則・木村大介・今井あい子. (2013). 「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受. サロンは情報の授受の場になっているか?. 保健師ジャーナル 69(9):712-719.
- 19) ポープ・キャサリン・メイズ・ニコラス (大滝純司監訳) (2008). 質的研究実践ガイド (第2版). 医学書院.
- 20) Wilcock, A A., Hocking, C. (2015). An Occupational Perspective of Health 3rd edition. Slack Incorporated, Thorofare, NJ.
- 21) Capon, A.G. (2014). Human Occupation as Determinants of Population Health: Linking Perspectives on People, Places and Planet. Journal of Occupational Science 21(1):8-11.
- 22) Rusford, N. Thomas, K. (2016). Occupational Stewardship: Advancing a vision of Occupational justice and sustainability. Journal of Occupational Science 23(3):295-307.
- 23) 川島典子. (2010). 介護予防におけるソーシャル・キャピタル. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要 5:229-241.
- 24) 近藤克則. (2019). 介護予防を目的とした住民運営通いの場で支援を行う作業療法士の役割. リハビリテーション科学ジャーナル 14:47-59.
- 25) 斎藤民・近藤克則・村田千代栄・鄭丞媛・鈴木佳代・近藤尚己・JAGESグループ. (2015). 高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差 - JAGESプロジェクトから - . 日本公衛誌 10:596-607.
- 26) 田島愛・大橋明・橋本廣子・上平公子・道林千賀子. (2017). 高齢者サロンにおける男性の参加要因に関連する探索的検討. 岐阜医療科学大学紀要 11:59-72.
- 27) 鈴木佳代・近藤克則・JAGESプロジェクト. (2014). 見える化システム JAGES HEART を用いた介護予防における保険者支援. 医療と社会 24-1:75-85.
- 28) 山谷麻由美・近藤克則・近藤尚己・荒木典子・藤原晴美. (2016). 長崎県松浦市における地域診断支援ツールを活用した高齢者サロンの展開 : JAGES プロジェクト. 日本公衛誌 9:578-585.
- 29) 古川明美・内藤徹. (2015). 地理情報システムに基づいた介護予防としての高齢者サロンの最適配置問題 - 徳島県小松島市の事例にて - . 徳島文理大学研究紀要 89:1-6.

Structure of indirect support that can be given by occupational therapists in preventive care aiming at health promotion

- A consideration from the viewpoint of Occupational Science on factors promoting participation in a community-based social program -

Tajima Akiko ¹⁾, Kondo Katsunori ^{2), 3)}, Keitoku Tamio ⁴⁾, Yuki Shihou ⁵⁾

1) Seirei Christopher University, School of Rehabilitation Sciences

2) Center for Preventive Medical Sciences, Chiba University

3) Department of Gerontological Evaluation, Center for Gerontology and Social Science, National Center for Geriatrics and Gerontology

4) Iryo Sosei University, Faculty of Health Sciences

5) Fukui Health Science University, Faculty of Health Science

Abstract

Aims: This study aims to extract factors that promote participation in a community-based social program in a local senior salon via qualitative and inductive analyses and discuss a structure for occupational therapists to provide indirect support. **Subjects and methods:** An interview was conducted with Mr. A, who was involved in the launch of a local senior salon, and a focus group interview was conducted with four researchers who have studied the role of senior care centers among the elderly and elderly care. An inductive analysis was conducted. The results were categorized, and a concept explaining each category was assigned. Additionally, a theme was set based on the knowledge of occupational science. **Results:** Factors were classified into those related to people and those related to place. Factors related to people were further divided into “belonging” and “doing” in terms of the human as an occupational being. **Discussion:** When an elderly person is deemed as an occupational being, a local senior salon was a place that accepts all elderly people, provides elderly people with a sense of belonging, and provides them with a sense of doing while cultivating social capital.

Keywords : Local Senior Salon, Indirect Support, Occupational Therapist, Health Promotion, Social Capital, Occupational Science